



Title	異文化間交流の文脈における特殊用語使用に関する一考察 : 会話参加者の関係性を中心に
Author(s)	吉川, 友子
Citation	大阪大学言語文化学. 2001, 10, p. 273-285
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78009
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

異文化間交流の文脈における特殊用語使用に関する一考察

—会話参加者の関係性を中心に— * 1)

吉川 友子 **

In Japanese conversation between Japanese people and foreigners, the Japanese occasionally use special terms that can be understood only by Japanese who have a cultural knowledge about the foreigners. Such jargons are regarded as having exclusiveness to enforce the attribute boundaries of the speaker (Spolsky 1998:33, Richards et al. 1992:193). The purpose of this paper is to describe how the participants of the conversation assume their own selves and others', and how their social relationship is developed, maintained, or amended, in sequences of utterance when jargons are used at a gathering for intercultural exchange.

Ninety-five jargons were found in a question and answer conversation, lasting ninety minutes, among two foreigners (Malaysian students in Japan) and sixteen Japanese. Two out of the cases of jargon use, which were used more than two times including a Japanese questioner's initial use, were analyzed within the concepts of categorization (Sacks 1995) and participation framework (Goffman 1981).

In both data, a Japanese questioner tried to distinguish himself from other Japanese and to indicate alignment with the foreigners by using jargons. However, both questioners gave up their intentionality (Schutz 1970) to share the same category with the foreigners when the relevance of the questioners' knowledge, which they assumed to share with the foreigners, failed. The questioner stopped his conversation in the first data when he failed his foreigner-oriented categorization. On the other hand, many Japanese started to share the role of the questioner as an addressed recipient in the second data when the questioner accepted that he was in the same category as other

* A Study of Jargon Use in the Context of Intercultural Exchange: Focusing on Relationship of Participants

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

1) 本稿は、2000年3月25日に東京都立大学で行われた社会言語科学会第5回研究大会における筆者の発表『異文化間交流の文脈における特殊用語の使用』（吉川2000）をもとにしている。

Japanese.

The Japanese who initiatively used jargons had intentionality to foreigners' category, while the alignment caused exclusiveness to many participants. This paper clarified that not only the alignment among the members of the same category but also the personal intentionality of belonging to any category involved use of jargon. Also it was shown that the feature of participation in the conversation when a questioner failed his foreigner-oriented categorization depended on whether other participants accepted the new category that the questioner chose again. It is significant to analyze various data in detail to reconsider the phenomenon of intercultural exchange.

1 はじめに

複数の日本人と外国人による日本語の会話において、その外国人の文化に通じている人のみが理解できるような用語が日本人によって使われる現象が観察される。このような特殊用語使用によって、実際に何が行われているのだろうか。

一般に、特殊用語 (jargon) は共通の関心事によりある属性に類別できる人々によって使用される言語変種のひとつとされ、その属性の中の人同士は結びつきが強められるが、外にある人々にとっては理解できずに境界がひかれ、自己と他者の属性を際立たせる機能を持つとされる (Spolsky 1998:33)。このため、特殊用語という用語そのものがこの排他性を批判的に呼んだものとされている (Richards et al. 1992:193)。

異文化間交流を目的とする会合では、参加者が相手文化に対する理解を示して相手との距離を縮めたいと考え、特殊用語を使うのかもしれない。たしかに、このような会合では相手の国や文化、または広く異文化に興味を持つ日本人が参加していると考えられる。しかし、複数の人が参加するため、特殊用語を駆使できるほど相手文化についての知識・経験を持ち合わせた参加者ばかりではないことも事実である²⁾。参加者の属性や持ち合わせる背景知識の内容が多様化しているならば、特殊用語の使用は異文化間交流のその場にいる人々の間にも属性に関する境界を作り上げるのではないだろうか。

本稿の目的は、特殊用語が使用された発話連鎖の中で、参加者が自己とその場に居合わせる人々をどのように位置づけ、どのような社会的関係性を形成し維持あるいは修正

²⁾ 筆者の収集した談話資料では、相手国の位置すら最近まで知らなかったと述べている参加者もあった。

していくのかを明らかにすることである³⁾。このため、カテゴリー化を分析の中心とする⁴⁾。日本人と外国人による談話をカテゴリー化に重点をおいて分析した先行研究には西阪(1997)があるが、これはラジオインタビューによる一対一会話を分析し、異文化性が適切とされる過程を記述したものである。本稿では複数の参加者による会話を詳細に観察するので、話し手・聞き手のステイタスをも考察しながら分析を進めてゆく。

2 研究の枠組みと談話資料

本稿では、会話参加者が自分や相手をどのようにとらえているのか、相互行為のその時に言語的、非言語的に示されると考える。この表示された互いの位置づけを明らかにするために、Sacksのカテゴリー化に関する概念(Sacks 1995:Part I pp.40-48, 300-311, 335-337)⁵⁾を用いる。また、これを観察するために、その発話における話し手・聞き手としての役割行動を詳細に分類する必要があると思われる。このため、Goffmanの参与の枠組み(Participation framework, Goffman 1981:131-153, Schiffrin 1994:104)⁶⁾を援用する。表される自己と他者の位置づけと会話行動上受け持つ役割との両面を見ることによって、特殊用語を使用している場における会話参加者の実像に近づくことができると考える。

本稿の談話資料は、小規模講演会における約90分の質疑応答会話による。これは、滞日マレーシア人留学生(R1)が留学生活に関する約15分間の講演を行った後に続くもので、付き添いの同国人留学生(R2)も応答者として加わっている。聴衆は、日本人

³⁾ したがって、特殊用語の使用が表示しうる意味を異文化間交流の相互行為における参加者関係という視点から具体的事例の中に求めるものであり、特殊用語機能全般を一般化するものではない。

⁴⁾ 本稿では属性すなわちカテゴリーを広くとらえている。Goffman(1963:2)は、カテゴリーは社会的場面によって決定されると考え、カテゴリーを「社会的アイデンティティ」と呼んだ。これは、職業のような社会構造上の属性だけでなく、たとえば「正直」のように人柄を表すような属性をも含んでいる。Sacks(1995)も、カテゴリーに多様なセットやクラスを広く含めている。

⁵⁾ 初対面の場面などで、相手を何らかの社会的階級や集団のカテゴリーにおさめようとする時、カテゴリー化装置(Membership Categorization Devices)に当てはめる。これは、「赤ちゃん」や「お母さん」を含む「家族」などのように、複数のカテゴリーがセットと見なされたものである。カテゴリーは「日本人」対「外国人」のように、しばしば対比的な一対として扱われる。また、カテゴリー付随活動(category-bound activities)は、あるカテゴリーのメンバーである個人によって期待どおり適切に行われ、カテゴリーを限定するような行為を指す。たとえば、「泣く」行為は「赤ちゃん」のメンバーによるカテゴリー付随活動として当然視される。

⁶⁾ 発話の瞬間に参加者それぞれが担う参与ステイタス(participation status)の関係を参加者がどのように合意しているかを網羅し、話し手のステイタスと聞き手のステイタスに分類して、さらにそれぞれ下位区分を行うモデルである。話し手のステイタスは発話の産出形態(production format)を説明するもので、身体的発声装置としてのアニメーター(animotor)、言葉を選ぶオーサー(author)、発話内容の登場人物であるフィギュア(figure)、発話内容の信条の主体であるプリンシパル(principal)の4つである。聞き手のステイタスは、承認された参加者(ratified participants)、未承認参加者(unratified participants)に二分される。本稿のデータのように小規模講演会の質疑応答という状況においては、すべての出席者が発話権をとることができ、発話者以外のすべての聞き手が目に見えていることから、聞き手のステイタスはすべて承認された参加者であるとする。これは、直接話しかけられた聞き手(addressed recipients)とそれ以外の聞き手(unaddressed recipients)に分けられる。

合計 16 人で、本稿の資料 1 および 2 で発話している主な日本人は 5 人 (N1~5) である⁷⁾。

また、本稿で扱う特殊用語は、日本人による発話のうち英語またはマレーシア語の言葉で、マレーシア文化またはイスラム文化に関する用語、あるいは国名以外の地名を含む地理・歴史・社会などに関する用語とする。この定義による特殊用語は談話資料中に延べ 95 例見られたが、このうち 7 例は留学生が使った特殊用語の意味を質問するために日本人が繰り返したものであった。その他の 88 例は、発話者の日本人がその意味を理解していると自覚して使っている特殊用語と考えられるが、このうち 63 例は、会話の前部分または R1 の講演ですでに使われたものであった。残る 25 例が、この会合では初めて使用された特殊用語である。本稿では、この 25 例の中から、同一特殊用語が初出を含めて 3 回以上繰り返された 3 例に着目した⁸⁾。このうち 1 例は、特殊用語が留学生側の知識になく、話題が続かなかったため割愛し、残る 2 例を分析する。なお、以下では文脈を示すために、連鎖の前後の発話も発話番号なしで掲載した。したがって、連鎖は発話番号 01 から始まる⁹⁾。

3 考察

3.1 特殊用語使用による連帯感と排他性

— 資料 1 —

＜マレーシアの民族楽器がタンバリンに似ているという形状を説明しているところ＞

N1 ただ、タンバリンの片方だけ、皮をはってあるんですね。

R2 [そうですね。

(2.5 秒)

01N1 あほとんど／ついでですけど：／、あの、ジョゲットと：、それと、あの：、ダンドット
とは、同じですか？違いますね？ジョゲットの方が古い。

02R2 [いえいえ、ジョゲッ・

03R2 ジョ、あの：：＝

04R1 °ダンドゥー°＝

⁷⁾ 講師は「留学生」と紹介されて前に座り、聴衆がそれを囲むように座っている。この「留学生」というカテゴリーに対して、聴衆は日本語を母語として主に日本の文化社会で生まれ育った人々と見られるため、ここでは「日本人」としておく。

⁸⁾ 初出の 1 回を除いたこれらの繰り返しは、すでに使われた特殊用語 63 例の中に数えられている。

⁹⁾ 談話資料中の記号は次のとおりである（参考 Tannen 1984:xix）。

。 下降イントネーション

? 語尾あがりイントネーション

・ 中断された発話

： 長く伸ばされた音

° あ° 音量が小さい

/xxx/ 書き起こし不能な発話

{ } 非言語情報

Italics 外国語の名詞

発話者不明

， 区切りまたはわずかな間

＝ 継続イントネーション

! 強調または情動的な強調

(1 秒) ポーズまたは沈黙

/あ/ 聞き取りにくく不確かな発話

< > 文脈の説明

[前の発話とのオーバーラップの始まり

X 固有名詞の省略

アンダーライン 注目の特殊用語

- 05R2 ダンドゥーはね：＝
 06N1 あれはインドネシアから入ってきてますよね。
 07R2 [そうですね＝
 08R1 ° んん°。
 09R2 ジョゲットは：，あの：，ほんと，美しいの，古い，伝統的。
 10N1 伝統的な民族：，／おんがく／ですよ。
 11R2 [はい。
 12N1 で今：はまあジョゲット／という，いったのより／ダンドットのほう，＝
 13R2 そうですね。
 14N1 [ですよね？モダン化されているわけでしょ？
 15R2 はい。
 16N1 [°であの：°，ジョゲットを，ジョゲットを，ま近代的に，っていうかポピュラー，も
 っと：，ポピュラー，なかんじにしたものが，ダンドット，っていう考え方，そうじゃ
 ないんですか？
 17R2 [いや，違いますよ。
 18N1 はあああ：。
 19R2 ん：，ダンドゥーはダンドゥーそのもの。
 20N1 [ダンドゥーは。(2秒) 基本的にはジョ，ジョゲ°ッ
 ト：°＝
 21R2 えっ？
 22N1 基本的には，ダンドットもジョゲットも，も，いっしょ°ですか°？
 23R2 いや，違いま°すよ°。
 24N1 [もうまったく別のもの？
 25R2 はい。
 26N1 /xxxxxxxxx/
 27R2 ん。
 (7秒)
 N5 ふたりは，おどれますか？ |一同笑い|
 (3秒)
 R1 ° え，あ，*menarikan*？ああ°おどれないですう： |笑い|。|一同笑い| あの，|笑い|，か
 たいんです： |笑い|。|一同笑い|
 (15秒)
 <以下、N5の質問の再提出とそれへの応答>

この連鎖の中で注目する特殊用語は、先の話題であった民族楽器に関連して発話 01 で出された「ジョゲッ (ト)」および「ダンドット (またはダンドゥー)」という伝統的な民族舞踏音楽の分類名である。このとき、N1 は質問者として発話権をとり、直接の聞き手である R1 および R2 の応答を期待している。会場の他の参加者は、直接話しかけられていない聞き手となる。先の話題では、民族楽器についての知識を説明できる「マレイ人」とその教えを受ける「日本人」というカテゴリー対ができあがっていた。その直後である発話 01 においても、R1 および R2 は現地の文化的知識を持つ「マレイ人」として、また、質問者の N1 は知識について教えを受ける「日本人」としてカテゴリー

化される可能性が高い。ところが、発話 01 では、質問者 N1 が R1 および R2 との知識共有を期待し、ひいては「マレイ人」と「日本人」というカテゴリー対を越えて R1 および R2 とのカテゴリー共有を期待していることが、以下のようにわかる。

まず、発話 01 は 2 種類の民族舞踏音楽が同じかどうかを尋ねる質問文であるが、質問者 N1 自身が「違う」という質問の答えを提示し、「(確認の終助詞) ね」を伴って R1 および R2 の同意を要求する形となっている。さらに、「ジョゲットの方が古い」という情報も N1 によってすでに用意されている。これらは N1 が事実として信ずることであり、直接の聞き手である R1 および R2 に答えとして期待していることである。つまり、N1 はアニメーターとして発声し、オーサーとして言葉を選びながら、プリンシパルとして自分の信条を主張しているのである。

ところで、あるカテゴリーのメンバーがそのカテゴリーに関する知識を持っていることは、カテゴリー付随活動に準じて当然視される。メンバーと共有される知識を持つことを示せば、自分もそのカテゴリーのメンバーかメンバーに非常に近い存在であることを主張できる。N1 は、発話 1 で示した知識によって留学生とこのような連帯 (alignment) を持つことをめざし、自分が留学生側の文化に関連性を持つ関係にあることを確認しようとしていると言えよう。一方、この質問の直接の聞き手ではない会場の他の日本人に対しては、共有知識や連帯を N1 も強く期待していないことになる。他の日本人は、この特殊用語に関する知識を持っていたとしても、直接の聞き手だけが期待される応答という行為はできない。応答するためには質疑応答への割り込みという形でしか発話権をとれず、実際に本資料ではどの日本人も発話権をとろうとはしていない。

続いて、応答しようと言葉を探している R1 および R2 が発話を終了しないうちに、N1 は発話 06 を出す。ここでも、N1 はアニメーター・オーサー・プリンシパルとして自分が R1 および R2 と共有していると信じる知識の適切性を確認しようとしている。ただし、先の発話 01 に対する R1 および R2 の発話 02~05 が、否定語やとりたての助詞「は」によって発話 01 の訂正を試みるようなものであったため、今度は、発話 05 の文が完結する前の先取り発話として、「(ダンドットは) インドネシアから入ってきた」という別の知識を提示している。この発話は発話 07 で R2 によって肯定されているが、R2 の発話は継続イントネーションのまま発話 09 に続いており、N1 の発話だけでは R2 が言いたかったことがカバーされていないことをうかがわせる。

この発話 09 は、R2 が言葉を探しながら話しているためか、完了した文の形になっていない。これを完成するかのように、すぐさま N1 は発話 09 の最後の言葉を文頭において発話をする (発話 10)。したがって、発話 10 のアニメーター・オーサーは N1 で、プリンシパルは R2 だと考えられる。しかし、「(確認の終助詞) ね」によって、発話内容

を自分も知っているということを示している。このように、補足を加えたり言い換えたりして相手のそれまでの発話をまとめるような発話は、Heritage (1985:100) などの言う定式化 (formulating) にあてはまる。定式化は、例えばテレビのニュースインタビュー会話で、質問者が視聴者に向けてゲストの話をまとめるようなものである。本稿の資料の発話状況では、留学生を含めたすべての聞き手に対して N1 が定式化を行っていると考えられる。この定式化は R2 の所属カテゴリーのメンバーが持つような知識を表しており、これによって、再び N1 は R2 との連帯をアピールしているようである。その一方で、N1 が連帯を期待していない聞き手 (日本人) と自分とを分離し、両者がまったく同じ「日本人」というカテゴリーに入るわけではないことを志向していると見ることができる¹⁰⁾。

同様に、発話 12 および 14 でも、最初の発話 01 で主張した「ジョゲットの方が古い」に従って「ダンドットの方がモダン化されていて今はこちらの方がはやっている」ということを述べ、自分が適切な共有知識を持っていることを示そうとしている。しかし、この後、発話 16 とその言い直しである発話 20 および発話 22 の N1 の知識は、発話 17、発話 19、および発話 23 で R2 によって否定されてしまう。ここに至って、N1 がこれまで築こうとしてきたカテゴリー化が適切ではないことになり、発話 24/25 および 26/27 の 2 つの隣接対でその不適切性が確認されることによって話題が終結される。

以上のように、本資料では、特殊用語の使用によって質問者 N1 が自分を留学生とカテゴリーを共有するものと位置づけ、自分以外の日本人を含めないで留学生との連帯を持とうとしていることが現れていた。つまり、異文化間交流の相手グループへの連帯感を示すと同時に、日本人という同一のカテゴリー内部でも差別化をはかろうとする個人の志向によって特殊用語が使用されていた。しかし、本資料では特殊用語で示そうとした共有知識の適切性は失われ、N1 が志向したようなカテゴリー化は成功しなかった。また、N1 の志向を反映するように、他の日本人はやりとりに参加してこない。そして、カテゴリー化の失敗とともに N1 はそれ以上話すことをやめ、他の日本人によって別の話題が出される。

3.2 カテゴリー化のやり直しと参与者の関係性

— 資料 2 —

<結婚式の料理についての話から、お祝いの贈り物の習慣について>

N5 はああ：<他にも「はあ：」という声>。

R2 そういう習慣が、あります。

¹⁰⁾ 志向性 (Intentionality) については、Schutz (1970) (森川・浜訳 1980) を参照のこと。

- 01N4 あの S <地名>の方ではね＝
 02R2 はい。
 03N4 あの、D <族>が、その、結納で：、カラバオを、お：贈りますわな。
 (2 秒)
 04R2 あ：<平板アクセント>＝
 05N5 クルバオ。
 06R2 あ、クルバオ。
 07N4 クルバオ。{|R1, 一同笑い, N2 笑い|
 08N4 その、ウエストマレーシアでは：、その、水牛を：、その、結納がわりに、贈る／とかい
 う／習慣あります？
 09R2 ありますよ、あの：：：、N<地名>だったら、ほくのところは、ん、ほくの、田舎は：、
 あんまりないですけどえ、ですけど：、あの：、R<地名>、という場所は、絶対あり
 ます。{|N2 笑い, 他の人たち笑い|
 10N4 何頭ぐらい。{|N2 笑い|
 11R2 いや、ふつう、1 頭ですね。
 12N2 ん：。
 13R2 いっ、あの、クルバオは 1 頭で、で、にわとりは。んで、あの、{|N2 咳払い| R<地名>
 の：、特徴は、その：、水牛は、ケルバオは、あっさ、その、朝、5 時：ぐらい、あ
 の：、あっさ：のおいのりありますよね＝
 14N2 うん。
 15R2 それ終わって、ですぐ、あれ、倒す、＝
 16N2 [° 殺すんだ：°。
 17R2 んん、倒して、んで、昼の、昼御飯に、準備します＝
 18N3? [すっご：い。
 19N1? [あああ：。
 20R2 すごいっすよ、R<地名>の人は。
 21N5 はあ：。
 22R2 だから、す：、あの、何というの、いっしょに：仕事するのは＝
 23N3? うんうん。
 24R2 [その：、労力、が、すごい° すよ°。<N5 など「うんうんうんうん。」>
 25N4 /gotong-royong<「協働」という意味のマレイ語か>/。||¹¹⁾
 26R2 え？あ、/gotong-royong<「協働」という意味のマレイ語か>/。
 27N4 /gotong-royong<「協働」という意味のマレイ語か>/。
 28N5? ° は：°。
 29N4 んであの水牛の肉は相当煮つめんと、° ありゃ° かたいでしょ。
 30R2 そうですね。
 31N4 あれ何時間ぐらい、° これ° 煮こんど° かなあかんの°？{|一同笑い| /xxxxxxx/
 {|一同笑い| 相当煮こまんと、
 32R2 いやでもね、＝
 33N4 /xx みたいな／ものやから。
 34R2 [でも：、うん、でも：、あの：、何というの？その：：、しばいかた？
 35N3? /しばくのね／<他の参与者、口々に「しばく」>。
 36N4 はっはあ：！

¹¹⁾ この語も 3 回繰り返されているようだが、聞き取りにくく不確かな発話であるため、本稿で該当する特殊用語としては扱わなかった。

- 37R2 あのお：、じゃあ、そ＝
 38N4 [／しばいかたでいいんですかね／。
 39N5 °うん°、しばいかた
 40R2 しばい、ですね、°そうゆうの°、あの：ね、ほくは：、それがわからないですから、あ
 の：お父さんが、そのしばいかたにより、＝
 41N3? うん。
 42R2 あの：、その肉が、かたくならない。
 43N3 あああ：：：！＜「ねえ：」とあちこちで感心、納得する女性たちの声＞
 44R2 それもあ、だから、うまい人は、ぜったい、＝
 45N3? [んん、やわらかい！
 46R2 ぜったいやわらかいっすよ。
 47N3? [ああ：。＜他の参加者が口々に「あああ：」「そお：」と納得する
 声＞
 48N4 でも牛肉みたいには、柔らかいことないでしょう。
 49R2 いや、牛肉、より、やわらかい°ですよ°。
 50N4 <一同、「あああ：」と感心、納得＞ああそうかなあ：。ほおお：、はじめてだ、だいたい
 これは：、まそのだいたい＝
 51R2 [そ、ほくも：、あ、ほくも信じるか信じへんか、わからな
 いけど：＝
 52N1 [あまだわからない
 |笑い、一同笑い|。
 53R2 でもお父さん、そうゆったんですよ。
 54N4 °ああそうですか°。
 55N3? [へえ：。
 (2 秒)
 N5 その R (地名) の人も、＝
 R2 んん、
 N5 M (民族名) ですか？

資料 1 と同様、資料 2 でも発話権をとるなり複数の特殊用語が出されるが、今度の N4 は自分を他の日本人から明確に分離できなかった。まず、N4 は質問の背景知識を発話 01 および 03 で R2 に確認しようとする。これは発話 08 の質問をするために必要だと思われた知識であるが、同時に、R2 との間に共通の知識による関連性を持つようなカテゴリー化を N4 が志向しているためと思われる。しかし、水牛を意味するカラバオという特殊用語の発音が悪かったため、N4 の発話は R2 に理解されなかった。このことは、R2 が迷っているかのような発話 04 から明白である。

そこで、発話 05 で、直接話しかけられていない聞き手の中から N5 が助け船を出し、マレーシア語らしく発音し直す。これによって R2 がようやく理解したことは、発話 06 で「あ」が気づきのマーカーとなり、正確な発音で「クルバオ」という語が繰り返されていることからわかる。N5 の助け船は、質問者である N4 をプリンシパルとし N5 をアニメーターとして行われている。すなわち、質問者 N4 の話し手のステイタスが、直接話

しかけられていない聞き手の N5 によって共有されたことを示している。これは、N5 に代表される他の日本人と N4 とのカテゴリー共有を決定づけ、資料 1 とは異なる展開のきっかけとなった。

発話 07 で N4 は自分の発話を矯正すると同時に、自分が留学生と共有していると信じていた知識に不足があることを認識する。その直後、R1 および他の日本人たちによる笑いが生じている。これは、日本人にとってマレーシア語の発音が難しいこと、すなわち、N4 が十分に日本人であることを、R1 および他の日本人が認識しているということである。これは同時に、N4 が特殊用語の使用によって目指したカテゴリー化が失敗したことを、その場の参加者が受け入れたことも示している。特に、R1 の高い笑いが最初であった。N4 が知識の共有を志向していた相手である R1 の笑いは、N4 と留学生との関連性の適切さが消滅したことを明らかにした。また、ほぼ同時に起こった日本人たちの笑いを、N4 の失敗に対する笑いというよりはマレーシア語の発音が正確にできない日本人に対する自嘲の笑いというカテゴリー付随活動だと考えれば、N4 を自分たち日本人のカテゴリー内に歓迎する笑いであるとも言える。この笑いは、これ以後日本人たちが非言語行動などで積極的にやりとりに参加してゆくきっかけとなった。以上のように、N4 が志向していた自分と留学生とのカテゴリー共有は達成されず、N4 は他の日本人と同じカテゴリーを選択し直すことになったのである。

続く発話 08 では、N4 は再び「ウエストマレーシア」という特殊用語を使っているが、先に失敗した「クルバオ」という言葉に対しては「水牛」という日本語の用語を代用して質問文を完成している。ここでのオーサー・アニメーター・プリンシパルは N4 である。留学生と同様に特殊用語を使いこなすようなカテゴリーメンバーに自分はいりきらないことを認めて特殊用語を日本語に言い換え、その他の日本人全員と同じ「日本人」カテゴリーのメンバーとして、質問文を完成しているのである。

N4 によるこのようなカテゴリー化のやり直しは、他の参加者にも受け入れられたようだ。発話 09 で R2 が応答を行うと、N2 を始め他の日本人が笑いによって再びやりとりに参加する。音声資料だけでは笑いの原因は特定できないが、まるで質問者と応答者の生真面目な応答の様子がおかしいとでもいうようである。ただし、このような笑いが単なる冷やかashiではないことは、発話 12 で R2 の応答に対して N2 が感心したようにあいづちを打っていることからわかるだろう。一方、R2 もこの日本人たちによる参加の流れに従って、N4 だけでなく会場全体に直接話しかけるような応答を続ける。とくに、発話 13 では、参加者全員の意味的理解を得たという認識と同時に N4 の特殊用語志向への理解を示すため、どちらも N4 がオーサーとして選んだ日本語の「水牛」と特殊用語の「クルバオ」を併用している。また、発話 11 および発話 13 に直接的にあいづちを発

しているのは質問者 N4 ではなく N2 である（発話 12 および発話 14）。さらに、発話 15 で R2 がオーサーとして選んだ「倒す」という言葉を N2 が「殺す」と言い換えて定式化しようとしている。R2 は、その定式化を肯定して自分の言葉をもう一度繰り返している（発話 17）。以上のようなやりとりは、N4 の質問者としての役割を、まさに N2 が同じカテゴリーメンバーとして共有して行っていることであると考えられる。

重要なのは、資料 1 ではやりとりに参加してこなかった他の日本人が、資料 2 では N4 に代わるかのように活発にあいづちを出しているということである。発話 16 の N2、発話 18 の N3?、発話 19 の N1?、発話 21 の N5、発話 23 の N3? など、他の日本人はももとの質問者である N4 に準じた聞き手として応答の発話を引き受け、オーサー・アニメーター・プリンシパルのステイタスを N4 と共有しながら、笑いおよび積極的なあいづちを出している。これは、N4 と他の日本人との連帯およびカテゴリーの共有を意味している。

発話 25 では、N4 が再びマレーシア語で「協働」を意味するものと思われる特殊用語を出し、R2 にも受け入れられている（発話 26）。R2 が理解したことを確認する N4 の発話 27 に即座に続いて、発話 28 で N5 が直接の聞き手と同様に理解したことを示す感嘆の声を発している。発話 25 のように専門的でまた聞き取りにくい特殊用語使用は、参与者全員には理解されないものであろう。だが、最初に助け船を出したほど相手文化への知識を持つ N5 には理解できた。そして、すでに N4 のカテゴリーを共有しているメンバーのひとりとして、N4 同様の応答を行い、直接の聞き手の役割を共有している。

以上のように構築された参与者間の関係性は、この後さらに活発なものとなって、発話 31 に現れた会場全体の笑い、発話 35 の N3? その他のあいづち、発話 43・47・50 の複数の日本人による感嘆のあいづちなどやその他の非言語行動に表され、発話 55 の後で話題が変わるまで続いている。本資料では、資料 1 と同様、質問者の N4 が特殊用語によって留学生との連帯および他の日本人との差別化をはかった。しかし、資料 1 と異なり、直接話しかけられていない聞き手である日本人たちが、質問者 N4 とカテゴリーを共有する参与者として活発に会話に参加した。そのきっかけは、N4 が最初のカテゴリー化の失敗を認めてカテゴリーを提示し直したことが、他の参与者に受け入れられたことであった。

4 まとめ

本稿で見てきた 2 つの資料では、質問者として発話権をとった日本人が、特殊用語の使用によって他の日本人と差別化をはかり、留学生との連帯感を持つようとしていた。しかし、どちらの例でも留学生との共有知識の適切性が崩れると同時に、留学生と同じ属

性を共有したいという発話者の志向も達成されなくなっている。また、資料1では、特殊用語によって始められた話題が終わるまで、N1とR1およびR2との間で行われるやりとりには他の参加者は入ってこない。他方、資料2では、特殊用語使用に頼った差別化が崩れたことをきっかけにして、より多くの参加者が活発にやりとりに参加してきた。すなわち、資料1では、他の日本人を脇に置いたままカテゴリー化の失敗と同時に話題をやめてしまっているのだが、資料2では、カテゴリー化をやり直して他の日本人とのカテゴリー共有を認めたことによって、他の日本人たちが質問者の役割を積極的に分担し始めたのである。

本稿では、異文化間交流を目的として日本人と外国人（滞日留学生）の間で会話がすすめられているこの時この場所で、特殊用語が使用されるとき何が起きているのか、参加者の関係がどのように決定され変化するのか、を明らかにすることを目指した。そして、特殊用語の使用による連帯感の表示が、同時に多数の参加者に対する疎外感を生むことを明らかにした。これは、同じ属性あるいは背景知識を共有する者同士の親疎表明だけではなく、共有あるいは差別化を望むようなカテゴリー化の個人的な志向のために特殊用語が使用されることを表している。さらに、カテゴリー化に失敗したとき、カテゴリー化をやり直して他の参加者に受け入れられるようにするかどうかによって、その後の会話への参加の形態が大きく異なることも示された。

複数の人が異文化間交流を目的に掲げ、交流を行っていると考えているとき、その交流活動の中では別の現象、例えば参加者間の差別化や再カテゴリー化が進められている。異文化間交流という現象は、まさにその場その時によって、相互行為を通してつくりあげられてゆく。異文化間交流の意味を再考するためにも、特殊用語使用など談話の詳細に注目してさらに多くの資料を分析してゆくことが重要であるだろう。

参考文献

- Goffman, E. 1963 *Stigma: notes on the Management of Spoiled Identity*. N.Y.: Simon & Schuster
 (石黒毅訳 1970 『スティグマの社会学』 せりか書房)
- Goffman, E. 1981 *Forms of Talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Heritage, J. 1985 Analyzing News Interviews: Aspects of the Production of Talk for an Overhearing Audience. In Van Dijk (ed.) *Handbook of Discourse Analysis Volume 3 Discourse and Dialogue*. London: Academic Press
- 西阪仰 1997 『相互行為分析という視点：文化と心の社会学的記述』 金子書房
- Richards, J., Platt, J. & Platt, H. 1992 *Dictionary of Language Teaching & Applied Linguistics*. Essex: Longman

- Sacks, H. (Edited by Jefferson, G. with an introduction by E. Schegloff.) 1995 *Lectures on Conversatin Vol. I & II*. Oxford: Blackwell
- Schiffrin, D. 1994 *Approaches to Discourse*. Cambridge: Blackwell
- Schutz, A. 1970 *On Phenomenology and Social RelatioN*. Chicago: University of Chicago Press.
(森川真規雄・浜日出夫訳 1980『現象学的社会学』紀伊国屋書店)
- Spolsky, B. 1998 *Sociolinguistics*. Oxford: Oxford University Press
- Tannen, D. 1984 *Conversational Style: Analyzing Talk Among Friends*. NJ:Ablex
- Yoshikawa, T. 1999 *Significant Expression of Self-image in Cross-cultural Communication*.
Handout of the 12th World Congress of Applied Linguistics, Tokyo. pp.52-57
- 吉川友子 2000 『異文化間交流の文脈における特殊用語の使用』社会言語科学会第5回
研究大会予稿集 pp52-57